

日本ボストン会会報

発行者 日本ボストン会事務局

名古屋ボストン美術館の準備状況

名古屋ボストン美術館館長 小倉忠夫

一昨年、会報第7号で名古屋ボストン美術館の設立についての概要をお知らせ致しましたが、その後も着々と開館の準備が進められております。

建物は複合ビルですが、全日空系のホテル グランコート名古屋と名古屋都市センターが入る高層ビル(高さ135m)はすでに全部立ち上がっており、隣接する美術館は目下建築進行中です。

清水建設㈱が担当するこの金山南ビルの建物全体の完了は、1998年11月末であり、そのオープンは1999年4月中旬の予定となっております。

先般、10月末にボストン美術館のベンジャミン副館長、ゲッチェル展覧・デザイン部長、モース東洋美術部副部長ほかが来名し、建築現場を視察のあと、日米会議と夕食を共にしました。

また、名古屋からも10月にミュージアム・ショップの会議、11月に美術館建築設計協議、12月に開館展の具体的な打合せにボストンに行っております。

因みにボストン美術館のカニングハム副理事長が名古屋の理事、ロジャーズ館長が評議員に就任し、名古屋側から伊藤喜一郎理事長と私がボストン美術館のOverseerに就任するなど、お互いの関係がますます深まっております。

さらに、今後は、両館の学芸系統の密接な協力のもとに、展覧会の企画と運営が円滑に進められるよう期待しています。

おわりに名古屋ボストン美術館のホームページが1997年6月に開設されたことをお知らせいたし

ます。美術館の概要、建築の進行状況、開館展覧会の予告案内、米国ボストン美術館との関係のページのほか、その豊富なコレクションの紹介、ボストンの名所案内のページなどもあります。アドレスは<<http://www.nagoya-boston.or.jp>>です。また、米国ボストン美術館のホームページ<<http://www.mfa.org>>にはリンク・ボタンが設置してあり、そのボタンからも名古屋ボストン美術館に飛ぶことができます。どうかお楽しみ下さい。

名古屋ボストン美術館展覧会予定

第1回企画展(1999年4月~9月)

モネ、ルノワールと印象派の風景

第2回企画展(1999年秋~2000年春)

岡倉天心とボストン美術館

第1回常設展(1999年4月~2004年春)

エジプト・ギリシャ・ローマ

古代地中海世界の美術



金山南ビル建築進行状況('98年2月)

日本ボストン会イベント

- | | | | | |
|---|----------------|-------------------------|------|----------|
| 1 | 千鳥が淵お花見会 | 98年4月6日(月) | 午後6時 | (2ページ参照) |
| 2 | ハイキングの会(静岡県由比) | 98年5月16日(土) | | (7ページ参照) |
| 3 | 第6回懇親ゴルフ会 | 98年6月5日(金) | (予定) | (7ページ参照) |
| 4 | 総会開催予定 | 98年11月5日(木)、又は11月13日(金) | | |

歴史を飲もう会

1月31日 天心六角堂を訪ねる

一昨年11月、台東区谷中の岡倉天心記念公園で六角堂のミニアチャーを拝見したが、今回は北茨城市大津町五浦に在るそのオリジナルを見学することとなった。一月末と言う時期を選定したのは是非共旬の鮎鱈で一杯やろうとの魂胆があったからである。

1月31日午前10時、JR常磐線大津港駅に集合した一行16名が目指す六角堂・旧天心邸等の遺蹟は、岸高く怪石巨石連なる景勝五浦海岸の台地に在り、現在は茨城大学五浦美術研究所となっている。

此の地は明治36年天心が齢42歳の時、隠棲の地として求めたものである。当時谷中の日本美術院が既に衰亡に向かっており、天心自身も精神的に行き詰まり状態にあったことが或いは関係しているかも知れない。

天心とボストン美術館との関係は翌37年に始まっている。この年は日露戦争が勃発し、一躍東洋が世界の注視を集めることになった時であるから、同館関係の仕事は時機を得たものとは言え、天心の活力を大いに蘇生させたであろう。報酬も破格の高給であった。とは言え、毎年半々を米国と日本で生活することは、当時よりも現代でも相当しんどい仕事である。航空機のない当時は尚更であろう。

天心は日本にいる間は五浦で釣りと思案の生活に浸り、その目的のため敷地内突出部に設けたのが六角堂であった。日本の美術史上、天心の業績は官職を辞した後の方が優れると評されるが、思案の場としての六角堂が寄与する処あったかも知れぬ。無論、固い思案ばかりでなく、恋したインド・タゴール家の縁者プリヤムヴェーダ・デーヴィーへの熱い想いを馳せたことも間々あったであろう。

それにしても、周囲に観光ホテルが立ち並び、沖合に工場群の煙突が望見されるなど、五浦の環境はすっかり変わってしまった訳である。変わらぬのは恐らく鮎鱈の味か。

遺蹟見学後は近くの天心記念五浦美術館に立ち寄り、横山大観、菱田春草、下村観山、木村武山の所謂「五浦の作家たち」の作品を鑑賞し、そのあと平潟港国民宿舎、須賀屋の鮎鱈鍋で一杯、気持ち良く終わった午後3時過ぎ解散となった。

(篠崎史郎記)

春爛漫の桜のもと

千鳥が淵で会いましょう

今年もお花見会を九段の千鳥が淵で行います。夜桜を見ながら、熱燗やビールを呑みながらわいわいがやがや、楽しみたいと思います。

昨年と同じコースの散策のあとは、これもまた昨年と同じ、近くの格安のイタリアレストラン「すてーき屋らいむらいと*」で、更に盛り上がりたと思います。(*千代田区九段南3-5-4川島ビル2F、 ☎03-3230-2593)

ご夫婦は勿論、お子様連れや恋人連れでの参加を期待します。勿論、寂しくお一人で参加される方も大歓迎、皆で楽しい一夜をすごしましょう。

日時: 4月6日午後6時-7時

集合場所: フェアモントホテル前

午後6時から6時30分迄幹事がホテルの前をうろうろしています。

6時半以降のご参加でもOKです。

交通機関: 地下鉄「九段下駅」下車徒歩8分

費用: ¥5000位

申込み先: 藤盛紀明・冨美子

すてーき屋らいむらいと地図



五浦海岸にて 1998 1 31

ホームステイ受入報告 (11月8-9日)

ボストン日本人会が派遣する日本研修プログラムに依るメドフォード市、ブルックライン市からの米人教師の受入れは1989年に始まり、昨年迄に24名が来日されました。お世話をされている国際教育情報センターからの連絡を受け、会員有志が1994・1996・1997年にホームステイを受入れました。昨年来日されたのは次の3人の先生方です。

Ms. Christine M. Cannave, Medford.

Mrs. Gwen Cioffi, Medford.

Ms. Iris F. Feldman, Lawrence School

ホスト・ファミリーは次の方々にお願ひしました。

酒井一郎様、村上憲太郎様、新名順一様

関係者からご寄稿を頂きましたのでご紹介します。

(酒井一郎・典子様宛お礼状より)

12/9/97, Tuseday

Dear Ichiro and Noriko

I can not thank you enough for the wonderful time I spent at your home. I miss the herbal hot tub! It was so relaxing. Although I was only there for a short time, you both made me feel welcome and special. I also enjoyed your daughter and son-in-law's company.

Everytime I reminisce about my trip to Japan, I think about you and your cappuccino maker, Ichiro's calm manner and guided tour of your neighborhood, Kenzo's infatuation with Led Zeppelin and Naoko's warm smile when she said how she liked America and how she tried to describe the difference between America and Japan with the reference of the ice cream cone. (probably the large scoops)

I took only slides instead of photographs, while in Japan. After New Year's I am going to show my slides to all my colleagues and students. During the Christmas vacation, I will have more time and I'll have some pictures made for you.

Domo arigato gozaimashita,

Christine,

ウェン・チオフィ先生をお迎えして

マサチューセッツ州教師のホームステイをして欲しいと友人からお電話を頂き、お引受け致しました。

子供たちが毎週土曜日に通っていた日本語学校のあるメドフォード市のメドフォード公立ロバート・ミドルスクールで英語の先生をしていらっしゃるウェン・チオフィ先生 (Mrs. Gwen Cioffi) は、いろいろの国の言語に強い興味を持った温和な方でした。

国際教育情報センターにお迎えに行ったわが家への帰路、レインボーブリッジを回って帰ろうということになりました。

夕暮れのロマンティックな夜景を背景に美しく延びているレインボーブリッジをドライブして、先生はとても興奮していらっしゃる様子でした。

ボストン港とは又一味違った異国の港の眺めが印象深かったとお手紙を頂き、忙しいスケジュールをこなしていらっしゃるのでは、お疲れではないかと心配していましたが、喜んでいただけたことをうれしく思っています。

遊びにきていた息子の友人二人も一緒に、先生を囲んで遅い食事をしながら、ボストンのこと、そして日本の高校生達の学校の様子や街の話題など、夜のふけるのも忘れておしゃべりを楽しみました。

「日曜日に高校の制服を着て街を歩いているのはどうしてですか?」と不思議そうに質問されていました。

翌朝はお昼までに九段の集合場所にお連れするという事だったので、十分に時間もなく犬と一緒に散歩しようということになりました。

小さなお寺の中にあるお墓の写真を撮ったり、植物の名前を日本語で覚えたり、メモしたり、何事にも興味を持って接していらっしゃる先生がとても印象に残っています。

一泊のプログラムという制約の中で満足頂けたかという心残りはありますが、これを機会に日本にいらっしゃるきっかけになればと願っています。

クリスマスカードといっしょに送られてきた写真を懐かしく見ながら、又心の中にボストンの暖かい思い出が一つ増えたことを幸せに思っています。

村上三千代

ポビー・ケネディの残したもの

水野 賀弥乃

正月三日が日ですっかり膨れたお腹をさすりさすり、久しぶりの朝刊を開いた。社会面の片隅の小さな活字がいきなり目に飛び込んできた。「故ロバート・ケネディ司法長官」という活字。記事はロバートの四男マイケルが、アスペンでのスキーリゾート中、樹木に激突して死亡したというショッキングなニュースだった。母親のエセル夫人は、既に三男テイビットを薬物の多量摂取により1984年に28歳で亡している。度重なる家族の悲惨な死を受けとめるエセル夫人は今年70歳になる。ポビーの死から30年、11人の子供達を育ててきた彼女の心中を思うと胸が痛んだ。

30年前

「ロバート・F・ケネディ」という活字に特別な魔力で引き寄せられるのは、私くらいなものだろうか。1968年6月5日夕刻、たまたま私はベッドにひっくり返ってマンガかなにかを読みながら、机に向かっていた姉とラジオを聞いていた。突然ロバート・ケネディ狙撃されるのニュース報道が入った。姉は、夕食の支度をしていた母や上の姉たちに大騒ぎでこのニュースを知らせにいき、私もベッドから飛び降りて「何かが起こった!」と思うだけで、よく訳のわからぬままついていった。ケネディ大統領の暗殺事件とその葬儀のテレビ中継を見た記憶はおぼろげにあったが、ロバート・ケネディについては全くその存在すらこれまで知らなかった。翌日学校ではシスターとともに彼の回復を皆で祈った。しかし凶弾から25時間29分後、彼は死んだ……ところが、妙なことにそれ以来、彼は私にとって生きた存在となったのである。霊的指導者というか、スピリチュアル・ペアレントというか、心の恋人、早い話が理想のタイプである。11歳の女の子にしてみれば、幾分、いや、かなり羨みだと思いが仕方がない。この絶望的片思いが私をボストンへ導いた。

公民権

ここでロバート・ケネディ(以下ポビーと呼ばせて頂く)の魅力をはんの少し語らせて頂きたい。ポビーは常にジョン・F・ケネディ(以下ジャック)の陰になっているように一見みえるが、彼は、むしろ兄よりも力強く、健全なアメリカを築く大統領になっていたのではないかと私は思う。確かに、8歳年上のジャックは長兄のジョーとともにポビーにとっては憧れの存在だったであろう。しかしポビーびいきの私としては、長じてからのこの兄弟は、ポビーあつてのジャックだったと常に思っている。大統領となって早々、ビッグズ湾上陸作戦によって114人の死者と1,189人の捕虜を出すという屈辱的な失敗をしでかしたジャックが最も信頼を寄せたのは、実弟のポビーであった。副大統領のジョンソンは、「あれ以来ポビーは大統領の非公式の最高顧問となった。」と(ニガニガしく?)語っている。ポビーはケネディ政権での“The number one and a half”だと冗談に語られていたという。彼は、兄への攻撃を全て一身に受け

悪役に徹した。大統領の側近のほとんどが反対した公民権法案も、ポビーは本腰で取り組むべきであると大統領に勸言した。公民権法案は議会を通過するはずがなく、白人の反発をかうことはケネディ政権にとって危険だと危惧する側近たちの中で、彼は、-大統領職の今後如何を問う次元の問題ではない。アメリカの将来が問われる問題なのだ-と情熱的といえるほど力をこめて説得した。そしてついに大統領をして、テレビを通じ人種差別という大きな誤りを国民全体が気付くことを語らせた。

世の痛み

アラバマ州モンゴメリー、バーミンハムでの暴動事件、ミシシッピ大学でのジェームズ・メレテスの入学阻止、アラバマ大学でのウォーレス知事との対決等、深刻化する人種差別問題に率直に取り組み公民権の立法化を実現させた(1964年ジョンソン政権下において成立)ポビーであったが、彼の熱意が真実となって人々の心を動かしたのはダラスの悪夢の後であった。「彼は大統領の死を経て、人々の痛み、世の中の痛みを自分の痛みとして知った。」と司法長官補佐ロジャー・ウィルキンス(当時国際開発局局長)は語る。1968年4月4日マーティン・ルーサー・キング師が暗殺された直後の彼のスピーチは心にしみる。インディアナポリスで彼の選挙演説を待っていた聴衆に、彼は静かにニュースを告げた。冷えた闇の中で悲鳴と怒りが聴衆に広がった。彼はアメリカ中の黒人たちとともに、暴力によって肉親を奪われた痛みを分かち合った。彼はしかし、ただ悲しみと憎悪に暮れるのではなく、残された者たちがその悲しみを乗り越え、分裂や憎しみではなく互いが慈しみ合ってゆくことこそ大切なのだと説いた。それは、彼自身が自らに語りかけ乗り越えてきた故の言葉だったのではないだろうか。淡々と静かな口調で彼は語りかけた。

What we need in the United States is not division; what we need in the United States is not hatred; what we need in the United States is not violence or lawlessness, but love and wisdom, and compassion toward one another, and a feeling of justice towards those who still suffer within our country, whether they be white or they be black... We've had difficult times in the past. We will have difficult times in the future. It is not the end of violence; it is not the end of lawlessness; it is not the end of disorder. But the vast majority of white people and the vast majority of black people in this country want to live together, want to improve the quality of our life, and want justice for all human beings who abide in our land. — Let us dedicate ourselves to that, and say a prayer for our country and for our people.

彼は「黒人の真ただ中に飛び込んで行けるただ一人の政治家」となった。当時の公民権運動活動家のマリアン・エーデルマンは語っている。「人道的で心ある国を築くために彼はなくてはならない人だった。」と……

"Why Not?"

彼の青い瞳は不正を徹底的に追及する鷹の眼光を放っていた。しかし42歳の生涯を終える数年前からそれは、社会的弱者、少数民族、貧しい人々、特に子供たちへの限りなく優しいまなざしとなっていた。想像を絶する貧困の実態を視察し、栄養失調で腹が膨れ不衛生な環境に住む子供たちを抱き、涙した。それは平等の国アメリカにあってはならない、「正義の不在」であった。社会的に恵まれていた彼ゆえに、その悲惨な現状が純粹に許せなかったのだろう。目をしばたかせながら恥ずかしそうに話していたボビーが、雄弁になった。心からの言葉が人々の心につながり、彼への信頼となって還ってきた。-正義がないなら、正義を存在せしめようではないか-と実行するのがボビーだった。

"Some men see things as they are and say why, I dream things that never were and say why not." これはボビーが幾度となく語った言葉である。常にアメリカの将来を夢み、その理想とするものを真直ぐに見つめ、その実現に労を惜しまなかった。ボビーは理想家であるとともに実行家であった。昨今、日本の政治家にこれだけの理想を抱き、"Why not?" 精神を以て現実問題に取り組もうとしているひとがどれだけのいるのだろうか。次の彼の言葉は今耳にするとちょっと皮肉に聞こえてくる。

The business of parties is not just to win elections. It is to govern. And a party cannot govern if it is disunited. (1965)

Moral courage is a rarer commodity than bravery in battle or great intelligence. Yet it is the one essential, vital quality for those who seek to change a world which yields most painfully to change. (1966)

次世代へ

子供達は彼にとって純粹に喜びであり慰めであった。彼の11人の子供達だけでなく、どんな子供達をも彼の関心であった。どの国を訪問しても、その国の若者たちを心にかけた。彼にとって、すべきことは次のジェネレーションのために健全な社会を築いてゆくことであった。核戦争一歩手前までいった緊迫の13日間(キューバ危機:1962年10月16日-28日)を経験したボビーは言う。

If we are to leave our children on a planet on which to live safely, to fulfill the bright promise of their lives, we must resume the journey toward peace. (1966)

また次の世代を担う若者たちに彼等の一人一人が夢の実現への責任を担っていることを呼びかけた。

It's the task of young people to lead for a better world. To have a better world for all of our people, to be dissatisfied and to say that we can do better. (1966)

アメリカの現状に、そして世界中の若い世代に心をかけた彼を失った時、アメリカは彼の理想とは逆方向へ導かれてしまった。昭和43年6月10日付け朝日新聞は次のように報道している。「ある黒人は『ボビーはわれわれを理解したただ一人の白人だった。キング牧師を失い、いままたボビーを失った。あとにいったいだれが残っているのか』と嘆いていた。」「病めるアメリカ」とよく当時のマスコミは書いている。それは日本も同じである。健全な道を見失い「正義」は死語となりつつある。人間が互いの相違を越えてその存在を尊重し慈しみ合って、平和でより善き社会を築いて行くことが、ボビーが言うように我々ひとりひとりに課せられたタスクなのである。今や地球という星に生きていくことを意識する時代となり、個々の普遍性が国境や人種を超え一層問われているのである。精粹欠如の民主主義ではなく、時空を超えた真の民主主義を勇気と信念をもって貫ぬいてゆくのは、誰でもない、その国、その社会に棲む人々ひとりひとりなのである。この自覚をもつことによって、私たちの自ずとなすべき行動や役割が各々その日常において見えてくるのではないだろうか。「しようがない」と黙って値上げや搾取を許し、「そんなものさ」と不当行為に目をつむることだらけの今の日本。"People should be angry enough to speak up!" と言うかん高いボビーの声は、曖昧な寛容さの中で生きている私も含めた多くの日本人の心に、主張すべきは主張し理想に向かって改善してゆく勇気を持って、と呼びかけている。

日本

彼は3度来日している。二度目(1962)と三度目(1964)は公人としての来日である。当時の新聞を見ると、私が知る限りでは、こんなに公私ともに連日大きく取り上げられた政治家はいないのではないかと思う。公式の予定以外にも積極的にじかに日本人の人々を知ろうとした。夜の居酒屋へ現われて常連客をびっくりさせた。升酒を勧められたがあまり飲めないでサカズキをもらってちびりちびりだったそうだ。日本女性についての質問に、「とても美しいと思うけれど、ほくはアメリカ女性と結婚しているので、あとはノーコメント。」とかわした。エセル夫人はデパートで展示されているお雛様の正札を見て目を丸くした後、三越前から赤坂見附まで、赤坂見附から丸ノ内線に乗り換えて国会議事堂前までの20分間乗客とおしゃべりしながら地下鉄乗車を楽しんだ。また、早朝の後楽園アイスバレスでは、出勤前のひとすべりをする若い会社員たちの中に飛び込んで、夫妻でスケートを楽しむなど、「訪日客のなかでこんな型破りな"スーパーマン"、はめずらしい。」と当時の読売新聞はコメントしている。東京を離れる朝5時半、まだ暗い中、東京赤坂の米大使館官邸の門を出た夫妻は報道陣もいないひっそりとした道を歩いて六本木方面へ向かう。聖ジョセフ修道院でのミサに与るためである。夫妻の生活の原点がここにある。

人が何と言おうとも・・・

以前にジャックの選挙運動に参加しボビーを知っているという紳士とボストンで昼食をともにする機会があった。彼は、ジャック、ボビー、テッドの3兄弟を評して、「ジャック

(6ページに続く...)

ボビー ケネディ (5 ページより)

クは魅力的で誰にでも好かれた。テッドは金持ちのどうしようもないドラ息子。ボビーは無慈悲で失礼な奴だったから僕は嫌いだったけれども、尊敬できる人物だった。」という。(40年位昔の彼等を評した言葉なのでお許し下さい。) 私が好きな女優の中にマリリン・モンローがいる。巷で何かとケネディ家との交流が憶測されているが、私が思うに、"I'd die if I made a girl cry. I don't think I've ever made my wife cry." (1966) というボビーの言葉が残っているから、私としてはそれを信じている。

30年前お父上の転勤でワシントンの小学校に通っていた友人の談である。ボビー派か否かとクラス中に聞いてまわっていたインド人のクラスメートがいたそうである。日本人である私の友人も勿論尋ねられた。選挙権があったのかどうかかわからないが、そのインド人のクラスメート一家は熱心にボビーの大統領予備選挙を応援していたようだ。クラスに2人しかいなかったが黒人の友達もまたボビーを応援していたという。友人は彼を失った瞬間のアメリカを鮮明に覚えていると、ノスタルジーをこめて語ってくれた。小学生までも大統領選に関心を持っていたということに驚きつつ(日本の首相に誰になるか小学生の間で大いに盛り上がったという話はちょっと想像しがたい) 私は友人の体験の中に本当に愛されていたボビーの存在を改めて実感した。

常に華々しく、洗練され、スタイリッシュな兄とは違って、シャツの袖をまくり上げ少し猫背気味に歩き、控えめではにかんだ表情からは想像できないほど情熱的に信念を貫くボビーの姿に私は痺れてしまう。冷酷、無慈悲と酷評される一方で、情熱的で慈悲深いと評価される。いつどこで語られたか定かでないが、ここにもうひとつ印象に残るボビーの言葉を掲げたい。

Like it or not, we live in interesting time, and everyone here will ultimately be judged, will ultimately judge himself on the effort he has contributed to build new-world society and extend to which his ideal and goal have shaped that effort.

今年で私も彼の歳に追いついてしまう。私は何をしているのだろうか大いに反省しつつ、彼の信念が少しでも現代に生きてゆくことを願ってこの文章を終りたい。

後記：この原稿を書いている最中、44歳になったボビーの次男、ロバート・F・ケネディ・ジュニアが来日していた。父親そっくりの風貌の中にしっかりと父のスピリットが生きているのを見て、実際ボビーが蘇って日本にいるような錯覚に一瞬陥った。垂れ流しの大企業や政府機関を相手に戦う環境汚染問題の弁護士として頼もしい活躍をしている。偶然にも私の甥が目指す分野である。ケニアで少年期を過ごした18歳の彼は、「地球は子供たちからの預かり物」と自然保護を唱えるボビー・ジュニアの活動に(叔母の影響も受けて?) 関心を持っている。ボビーの精神が受け継がれ生き続けている手応えがこんな身近にあった。

(エッセイスト)

故江戸英雄翁を偲ぶ会

音楽の会

昨年11月13日に逝去した江戸英雄翁を偲ぶ音楽会が1月24日(土)夕、昨年暮れにオープンしたばかりの東京オペラシティホールコンサートホール：タケミツメモリアル(新宿区、京王線初台駅下車)で開催されました。

この企画には桐朋学園高校音楽科第一期卒業生であり、若い音楽家の登竜門であるタングルウッド音楽祭の音楽監督を勤める小沢征爾氏が発起人となり、故人が「子供のための音楽教室」を通して関わりのあった音楽家達、またPTAの一人として創設・経営に係わってきた桐朋学園音楽部門の関係者、その他多くの音楽支援団体のご協力がありました。

故人の経済界に於ける活動は広く知られていますが、ピアニストであった弘子夫人を通して音楽文化のパトロンとしての経歴は余り知られておりません。そこで故人の遺徳を偲ぶ会が企画されました。

会場には木材が床・壁・天井に豊富に使用され、音響効果を考えて縦に溝を切った壁、ピラミッドを内側から見上げた形に段違いに天井から吊り下げられた反響板、ステージ正面に据えられたパイプ・オルガン、前席との間隔もゆったりと設けられた椅子、バリアフリーの床が作られ、車椅子で入場した白髪の老人達から、外国人、両親に連れられてきた小学生迄の幅広い千六百人の聴衆で埋められました。

コンサートは指揮者の小沢征爾氏からプログラムの最初と最後の曲目だけは、当日の趣旨に沿い拍手はしないようにと呼びかけがあり、有志によるオーケストラのJ.S.バハ「アリア」演奏で始まり、ヴァイオリン独奏、弦楽四重奏、中学一年生によるピアノ演奏、妙齢女性のチェロ演奏があり、最後はG.マーラーの交響曲第5番嬰ハ短調より第4楽章「アダージェット」で終了しました。オーケストラ演奏終了後、音ひとつない静かな時が流れ、しめやかに偲ぶ会は終わりました。会員の佐々木涼子さんが主宰する南青山音楽研究所で見出された英才中野翔太君のオーケストラに負けないピアノ演奏、趙静さんの嫺々としたチェロ演奏には惜しめない拍手が送られ、小沢征爾氏の若い演奏者達を育て励ます指揮振りが強い印象に残る一時でもありました。

当会からは10名が参加しました。(俣野善彦)

Thomas Cole (1801-48)

風景を通し精神的崇高性を表現

19世紀初めイギリスの絵画の影響を受けていたアメリカ絵画は、未開の大自然、そして開拓地の風俗等アメリカ特有の題材が選ばれる様になりました。

雄大な自然は神から授けられた贈り物と考え、ハドソン川上流に自宅とアトリエを移したのが初期アメリカ絵画の優れた風景画家の一人、Thomas Cole (1801-48) でした。

広大な自然を通して精神的崇高性を表現したのは Cole で、彼は聳える山を背景に森と湖、そしてそこに人影、又は動物を好んで描きました。深い森の中でどンドンデッサンを進めて行く内に時のたつのも忘れ、雄大な自然に生まれ育つ木々と同じ空気を吸って共存しているんだという実感が Cole の心を和ませ、幸せな気分にしていきました。

遠い遙か昔から息づいている山、森、岩、そしてはげしい流れの川は展開する楽園の様だと Cole は詩にもつづっています。1月2日から2月1日迄そごう美術館で開催された「わが心のアメリカ絵画展」の作品の中から、Cole の作品「スクール湖」を鑑賞してみましょう。

前景には米国の大自然の中に大きくたくましく木が描かれている。前景から中景にかけて描かれた美しく澄んだ湖に一頭の牡鹿が頭を上げ、空を見上げながら、仲間に追いつこうと泳ぎだした。湖の向こうは青々とした森、その後方に淡いパステルカラーで描かれた山は少し雲をいただき、気高くそびえている。それは夕日に輝いた湖に美しい影をおとしている。心暖まる希望に満ちた絵といえましょう。

Cole の影響を受けてハドソン・リバー派と呼ばれる Durand (1796-1886) や Church (1826-1900) によってアメリカ東部、西部、そして南米の風景が描かれました。こうした画家達の活動が契機となってアメリカ独特の題材を描くアメリカ絵画が誕生しました。(美術WG 酒井典子記)



トマス・コール (スクール湖) 1835-36年頃

ハイキングの会から

11月23日(日)に参加者8名で箱根の旧街道を歩いてきました。

お天気が心配されましたが、幸い歩いている間は晴れ間に恵まれ、紅葉の中を2時間ほど歩き、芦ノ湖を船で渡り、ロープウェイ・登山鉄道と乗り継ぎ、湯本で温泉に浸かって盛り沢山の一日でした。

今回は、5月16日(土)に静岡県由比に行きます。

東海道の由比駅から隣の興津駅まで、薩埵峠を経て1時間半程で歩けます。駿河湾越しに眺める薩埵峠からの富士は、広重の浮世絵にあるものです。近くには由比本陣公園や由井正雪の実家である正雪紺屋などがあります。

海沿いの街道を行くので高低差も無く、誰でも歩けるはず。参加されたい方は下記までご連絡下さい。詳細の予定をご連絡します。

申込み先: 土居陽夫・嘉子

第5回ゴルフ親睦会報告
正義の味方出現

当会の第5回懇親ゴルフは1997年11月13日(木)に埼玉県のユニオンエースゴルフ場で行われました。

紅葉の美しい時期で、和気あいあいの素晴らしいゴルフ会で、西川文夫さんが優勝されました。

前回の会報で、我々夫婦がまたもやブービーとブービーメーカーになるのを免れるために、「助っ人頼む」の記事を投稿しました。その効果があって、(株)アームの内藤徳幸さんが名乗りあげてくれました。

内藤さんは競技の始まる前に、私たちより必ず多いスコアである事を約束されました。そして約束通りのスコアで廻られました。さらに何人かの方も、我々に協力すべく努力され、我々は念願通りブービーとブービーメーカーを免れました。ありがとうございました。(藤盛紀明・富美子)

第6回懇親ゴルフ会予告

次の懇親ゴルフ会は6月5日(金)を予定しています。参加希望者は幹事迄お問い合わせ下さい。

近藤宣之
事務局

日本ボストン会1997年度総会

日時： 1997年10月24日(金)午後6時

場所： NEC三田ハウス 芝クラブ

出席者： 藤崎代表幹事他24人出席

議事： 代表挨拶、乾杯、活動報告、会計報告。

懇親会：

講演： 「ボストンとお茶と私」

お茶の水女子大学名誉教授山西貞先生

講話： 「BU卒業生から見たボストンの今昔」

立正大学教授山本澄子先生

参加者紹介： 茂木賢三郎さん

生田英機さん

第5回総会は近藤副代表幹事の挨拶にて開会。

まず、藤崎代表幹事より昨年の総会にはソウルに於ける学会に出席されていた為に、代表幹事として最初のご挨拶を頂戴した。藤盛副代表幹事の発声による乾杯のあと、歴史を飲もう会、ゴルフ会、ハイキング会、ボストンガイド・ブック頒布状況報告(残部36冊)、会計報告(収入43万円余、支出38.5万円、収支残約4.5万円)で終了し、懇親会に移行。

藤崎先生から、お茶の水大学名誉教授の山西貞先生とは1958年、フルブライト奨学生として渡米した時、同じ氷川丸に乗船したご縁で知己を得た旨ご紹介があり、「茶」に関するお話を伺う事になった。

ボストンは1773年のBoston Tea Party事件とか、岡倉天心がボストン美術館東洋部顧問として在米中の1906年 The Book of Tea を出版した事で「茶」に縁が深い街であった。山西先生についてもご専門の「茶の香り」の研究が、MIT に研究留学された折、日本では利用出来なかった検査用の瓶・加トグワイで「茶の香り」を研究したことで縁があり、爾来この研究を継続。ご自分のお名前とも同音TEA(茶)の研究、中国、インド、セイロン/スリランカ、インドネシアの茶の特徴、違い、薬理効果、利用法をOHPを使いお話し戴いた。

立正大学教授山本澄子先生は1953-56年、フルブライト奨学生として演劇コースのあるBoston University 大学院神学部留学され、修士課程を修了されたご経歴をお持ちで、現在日本の同大学同窓会会長をされております。ボストン留学中、学生の間でも話題となるBU在学中のMartin Luther Kingの演説会に出掛けたことがあり、最近Martin Luther

King Foundation から、故人の書き物があれば寄贈方要請の手紙を受け取った事が披露された。

幹事会記録

* 1997年12月13日(土)出席者15人

ボストン日本人会役員(会長 堀内實、婦人部長 増淵文子 新年会後)

ハイキング会報告(11月23日箱根)

ゴルフ会報告(11月13日エニシエスゴルフ 西川文夫氏優勝)

名古屋ボストン美術館現況報告

歴史を飲もう会報告(1月31日北茨城市五浦)

会報発行予定(98年3月末)

原稿依頼(2月末締切り)

ボストンガイドブック頒布状況(残部29冊)

会員入会状況(97年4月以降5人)

並木淳一さん、内山浩二郎さん、磯崎一郎さん、

黒沢馨さん、西川文夫さん。

Japan Society Chairman オルデン氏来日

Japan Society 創立100周年行事(2004年)

ホームステイ受入れ報告

酒井一郎様、村上憲太郎様、新名順一様の3家庭にてお世話。

会計報告

総会出席者25名で5万円赤字。

総会反省

欠席者に通信費として寄付を要請する。

開催方法、時期等意見交換。

代表幹事の2期先幹事候補選任・ローテーション

出版物発行企画意見交換

* 1998年2月27日(金)参加15人

レディース会報告

歴史の会報告(1月31日五浦海岸・六角堂)

ハイキング会報告(5月16日静岡県由比)

千鳥が淵お花見会(4月6日)

ゴルフ会(6月5日予定)

音楽の会報告(1月24日故江戸英雄翁を偲ぶ会)

会報発行状況報告(3月27日頃発送予定)

久下栄司さん渡米挨拶

京都ボストン交流の会との連絡(情報交換確認)

ボストンガイドブック頒布状況(残部17冊)

日本/ニュージャージー 交流の記録出版企画意見交換

次々期代表幹事候補選任経過報告

新会員入会(98年1月以降1人) 小林規威さん

次回幹事会7月2日午後6時半(場所新宿予定)